

ライカでグッドバイ

カメラマン沢田教一が撃たれた日

青木富貴子

)UNIFIX

THE WAR YEARS

MISERY IS REFLECTED IN THE FACES OF A
CHILDREN AS THEY STRUGGLE ACROSS A RIVER
L BOMBARDMENT OF THEIR SOUTH VIETNAMESE
1965 FILE PHOTO. THE PICTURE WON A
FOR UPI STAFF PHOTOGRAPHER

FILES PHOTO BY KYOICHI SAWADA 11-2-72 Jo
2712,1511334,1501130



文春文庫



文春文庫

375—1

ライカでグッドバイ

定価はカバーに
表示してあります

1985年3月25日 第1刷

著 者 青木富貴子

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-737501-X

文 春 文 庫

ライカでグッドバイ

青 木 富 貴 子



文 藝 春 秋

目次

序章	7
第一章 離陸	17
第二章 サイゴン	57
第三章 栄光	87
第四章 激戦	131
第五章 頂点	175
第六章 香港	203
第七章 カンボジア戦線	225
終章 あとがきに代えて	257
文庫版のためのあとがき	263
蛇の足として	267

開高健

ライカでグッドバイ

カメラマン沢田教一が撃たれた日

序章

一九七〇年十月二十八日、カンボジア。

一台のブルーの日本製小型車が国道二号線をプノンペン方向へ走っていた。

国道はゆるやかに拡がる一面の水田地帯を一直線にプノンペンまで伸びている。

大陸南部のこの土地は、いく枝にも分かれ蛇行するメコン河の茶褐色の流れに潤い、豊かなデルタ地帯となっていた。

小麦色に輝く稲の穂がどこまでも見渡せ、水田のなかに砂糖椰子が細い幹を伸している。そこには戦時下という緊迫した雰囲気も、殺伐とした空気も流れていない。熱帯特有ののびやかな自然がすべてを包み込んでいるようであった。

陽はもう暮れようという時間だった。が、それまで高く晴れ上がっていた空には、突然雨雲が垂れ込め、大粒の雨を降らせていた。雨期も終わる季節というのに雨足は激しく、水田地帯は早くも夜の闇に包まれようとしていた。

小型車は勢いを増す雨にうたれながら、スピードを上げていく。

車のなかには二人の男の姿があった。

ハンドルを握る男はアメリカ人記者。

若々しい顔付きのわりにツルツと禿げ上がった額が、この男に歳より老けた印象を与えていた。肩幅の広い軍人タイプの男で、がっしりした鼻筋がアメリカ人のそれもタカ派を思わせる雰囲気をもっている。そのワシ鼻の上に光る両眼が前方の国道を鋭くにらみ、右足はアクセルを強く踏み続けていた。

この男の隣りには日本人カメラマンが乗っていた。陽焼けした広い額には太く濃い弓型の眉が目につく。少し窪んだ眼、小鼻の拡がった鼻、引き締まった口元。津軽人特有の芯の強さを感じさせる男だった。骨太で頑丈な体をうぐいす色の開襟シャツとカーキ色のズボンに包み、その眼は運転する男と同じ方向に向けられていた。

日本人カメラマンは通過している地域が、政府軍の力の及ばない地帯であることをよく承知していた。陽の高いうちならまだ安全かもしれない。が、陽が暮れてくると保障はなかった。

平坦な水田地帯といっても、反政府軍がどこに潜んでいるかもしれない。彼らがアンブッシュ（待伏せ攻撃）を仕掛けてくる可能性は十分にある。

七カ月前のクーデターいらい、隣国で十数年と続いていた戦争が国境を越え、この小さな国にも猛威をふるっていた。神出鬼没のゲリラ戦が続くなかで、秩序は既に失われていた。混沌とした状態では、次に何が起こるか予測もつかなかった。

ジャーナリストに対してさえ、攻撃の手はやまなかった。

現にこの国ではジャーナリストの失踪事件が連続して起こっていた。取材に出かけたまま、急に姿を消してしまう記者の数が日毎に増えていく。そのほとんどが生還していない。

この日本人カメラマンも五カ月前に、国道三号線で反政府軍に捕まっていた。八時間に及ぶ監禁の末、運よく生還できた男なのである。

数日後、このカメラマンが捕まった同じ地域で、テレビ・チームの取材班一行八名が一度に消息を絶っている。彼らは脱出に失敗したもののか、処刑されたものか、その後の行方を知る者はいない。

ある時には無事釈放されても、数時間後、数日後にどうなるかわからないのが、この国の戦線であった。

明らかに二人は危険な地域を、危険な時間帯に通過しようとしていた。

二人の記者はこの日、ブノンペンから南四十キロ余りのチャムバクという村へ取材に出かけた帰りだった。

カンボジアでは自分たちの足で動きまわらない限り、正確な情報を把むことはできなかった。原稿を書くためにも、ましてや写真を撮るためには自分たちの車で出発する。誰もが危険を十分承知の上で取材活動を続けていた。

しかし、日本人カメラマンはこの日の取材に乗り気ではなかった。午後三時過ぎにブノンペンを出発することは、余りにも危険すぎた。

いつもなら午前中に出発し、三時頃までに戻るといふのがこの国の取材活動の鉄則だった。が、この日はそのアメリカ人記者に強引に誘われての不承不承の出発だった。

きょうはアンブッシュに遭うかもしれないよ。

カメラマンはやれやれという調子で、こういいながら出発した。それは半分冗談ともとれる口ぶりだった。が、この男がある種の不安を抱いていたことは間違いない。

行き交う車はなかった。激しい雨が水田を覆い、人っこひとり見当たらなかった。降り出したスコールは衰えることなく、前方の視界を塞いでいた。

ブノンペンまで三十四キロ。あと三、四十分もあれば十分帰りつく距離だ。この瞬間、車の後方から数発の銃弾が小型車に向かって放たれた。

アンブッシュ……カメラマンの抱いていた不安が現実のものとして二人を襲った。

狙撃者の放った一弾は後部ガラスを貫通し、ハンドルを握る男の首筋をかすめた。

車はいきなり国道をはずれ、左側の水田に突っ込み、そのままの勢いで大木へ激突した。続いて、数発の銃弾が至近距離から、無防備の二人の男の胸を撃ち抜いた。

UPI通信社ブノンペン支局長フランク・フロッシュ記者と沢田教一カメラマンの死体は、その夜一晩中降り続いた大粒の雨に打たれたまま、翌朝まで水田に放置された。

沢田教一、三十四歳。

報道写真家としての栄光を数多く手中にした男の、余りにあっけない最期であった。

沢田教一はUPI通信社カメラマンとして、自らベトナム戦争へ飛び込んでいった。

イアドラン溪谷の戦い、DMZ^{ディ・エム・ジイ}（非武装地帯）進攻作戦、八七五高地の戦い、ケサン基地、ユエ王城攻防戦、サイゴンの五月攻勢、そしてカンボジア進攻作戦など、激戦地には必ず、米軍の軍服に身を包み、首から二台のライカを下げる沢田がいた。

ナパーム弾がオレンジの炎を拡げ、M16ライフルが乱射されるなか、逃げまどうベトナム市民。焼き打ちをかけられた村から、米兵に抱きかかえられて避難する老婆。ベトナム容疑のレットルをはられた少年が、米兵をにらみつける鋭い目。負傷した若いアメリカ兵が呆然と空をみつめ、救出ヘリコプターを待つ姿。

川を泳いで銃弾の炸裂する村から、対岸へ逃げようとするベトナム人母子の写真。

「安全への逃避（フリー・トゥ・セイフティ）」と名付けられた一枚の写真は、沢田が戦場で撮りまくった何千ショットのたった一枚にすぎない。この写真は、一九六五年ハークの世界報道写真展グランプリに輝き、続いて一九六六年アメリカ海外記者クラブ賞、同年ピュリツァー賞の三冠を獲得した。

一枚の写真が、青森生まれの一青年の人生を大きく変えていった。一介の無名カメラマンが一躍「世界のサワダ」になった。それは、東北のアメリカと呼ばれた「三沢基地」のカメラ店に始まり、UPI通信社東京支局写真部、そしてベトナム戦地へと続く「三段跳び」の人生で

もあつた

寡黙で目立たない青年、沢田教一を青森からベトナムまで駆り立てていったものは何だったのだろうか。

歴史的に見て、戦争のあるところにジャーナリズムは育つという。ベトナム戦争は若い特派員の訓練場所となり、カメラマンには絶好のチャンスを与えた。

フランスが十九世紀にインドシナ半島統治の基点として都市建設をすすめた街、サイゴン。タマリンドウの緑の並木のなかに佇む熱帯の街は、戦争のブーム・タウンとなった。アメリカ軍の上陸とともに、各国のジャーナリストはいっせいにこの街を目指した。

新聞社、通信社、雑誌社、テレビ局の特派員は、志願してベトナム報道へ身を投じた。

アメリカ人、フランス人、ドイツ人、オーストラリア人、日本人……各国の特派員たちは競って米軍の戦況報告^{ブリーフィング}につめかけ、フランス式のキャフェで政治論議を続け、闇市で米軍の軍服を買っては戦場へ向かった。ホテルの一室やアパートを借りきつての急ごしらえの支局^{レギュラー}がメイン・ストリートの各所に並び、連日の取材合戦の拠点となっていた。

あるいは「ストリンガー」といって、いくつかの報道機関との細い「ヒモ」のような契約だけを頼りに報道活動が続ける者もいた。彼らは戦闘へ身を置く勇気さえあれば、十ドル、二十ドルで写真を売り、生活することができた。もし特ダネを把握せば、さらに高額のギャラを手にした。

そのうえ、ひょっとして事件の現場に居合わせれば、決定的な一枚をモノにし、グラランド・ブライズを手に入れることも可能だった。ひとりの若者が一躍、世界に名を轟かせることも夢ではなかった。

誰にでもこのチャンスを与えたのが、ベトナム戦争だった。

報道陣の数は最盛期に、六百人を越えるほど膨れ上がっていた。プレス・カードもとれず、サイゴンにたむろしていた若者も入ると、その数はさらに膨らむ。なかにはカメラもろくに扱えないカメラマンもいたし、戦争を自分の目で見たいと興味本位でサイゴンの地を踏む若者もいた。が、実際に最前線の激戦地へ向かった者は、ほんのひと握りのジャーナリストだけであつた。

「展覧会に出すための写真を撮りたい」

沢田教一にベトナム行きを決意させた理由は明快だった。沢田はベトナム戦争で、第二のロバート・キャパになりたいと思つていた一青年でしかなかった。そのためには、『決定的瞬間』に身を置くことを自分のルールにした。そして激戦に次ぐ激戦のさ中へ飛び込んでいった。

一発の弾丸でも当たれば命を落とす危険も顧みず、沢田を連日戦場へ向かわせたものは何だったのだろうか。

「これはおそらく最後の面白い戦争さ」

ロバート・キャパは一九五四年、インドシナ戦争に従軍した時、こう言い残している。

当時、日本に滞在していたキャパは、羽田から北ベトナムへ向かおうという時、引き止める友人、三木淳を前にこう言った。

「一晩考えたが、俺の血がベトナムに従軍するのを止められないんだよ。悪く思うてくれるなよ」

こうして日本を発ったキャパは、ハイフォン南方タイ・ビン地区で地雷に触れ爆死。四十一歳の人生を閉じた。

一度、戦場へ身を投じた報道カメラマンの血は、次の戦場へと自らを駆り立てるのだろうか。

ベトナム戦争は、ジャーナリストをひきつけて離さなかったという。

ギラギラと照りつける太陽、人間臭い喧噪、昼下がりの機関銃と爆弾、退廃的な空気、夜の闇の深さ、いつ弾丸が飛んでくるかわからないという生活。そこには生死を賭けてのドラマがあり、平和な日常生活では決して味わえない極度の緊張と興奮があった。

一度味わうと中毒症状を起こさせるまでに男たちを虜にしたものは、一体何だったのか。あるいはその苦さを知れば知るほど、危険を乗り越えれば乗り越えるほどのめり込んでいくのがこの戦争であったのかもしれない。

沢田には危険を嗅ぎわけける動物的嗅覚がある。サイゴンのジャーナリストたちはそう言っていた。

乗っていたヘリコプターが撃ち落とされ死傷者が続出した時も、沢田はかすり傷ひとつ負わなかった。

迫撃砲の一斉攻撃で身をおとした瞬間、それまでいたところに一弾が命中し、爆発することもあった。さつきまで話していた兵士が撃たれたり、わずか数メートルのところで地雷が爆発する危機も、何回となく無事切り抜けてきた。

「俺は悪運が強いから大丈夫だよ」

カンボジアに来てからも、沢田の運の強さは続いていた。

クメール・ルージュに捕まり、八時間後に釈放されてから間もなく、さらに約八十キロ西のキリロム付近の激戦地で、流れ弾がライカに命中したこともあった。一斉射撃から身を守るため、半日近くも水田に首までつかっていたこともあった。

十月三日には、国道六号線の最激戦地タンカウクで反政府軍に接近しすぎて、十五メートル先の樹の上から狙撃されている。逃げる足元三メートルのところでロケット弾が炸裂したが、沢田は首まで土をかぶるだけで無傷だった。

沢田教一の遺体は明けて十月二十九日、プノンペン市内のカルメット病院の霊安室に収容された。

火焰樹の繁る深い森のなかに佇む霊安室は、二台分の車が入れるガレージのようなもので冷凍装置もなく、クーラーがガタガタと大きな音をたてていた。裸電球がひとつ。破れた窓ガラ